

「奇想のモード——装うことへの狂気、またはシュルレアリスム」

MODE SURREAL: A Crazy Love for Wearing

2022年1月15日（土）～4月10日（日）

東京都庭園美術館

国際ファッション専門職大学 平井秀樹

1 はじめに

東京都庭園美術館が主催する「奇想のモード——装うことへの狂気、またはシュルレアリスム」展が、2022年1月15日（土）～4月10日（日）の会期で、東京都庭園美術館にて開催された。

1924年に、詩人アンドレ・ブルトンが、文学への行き詰まりとダダイズム¹⁾の限界のなかで、パリで『宣言』を公表したシュルレアリスム（超現実主義）は、文学、美術などのさまざまな分野で瞬く間に世界中に広まり、20世紀最大の芸術運動となった。偶然性や夢、幻想などを鍵に、無意識の世界にある新しい美や真実を追い求めたこの芸術運動の影響は、当時の文化全般だけでなく21世紀に生きる我々の生活の細部にまで及んでいる[オットアンジェ&南 2011: 6]。

本展は、シュルレアリスムがモードに与えた影響を一つの視座としながら、その自由な想像力と発想によって、モードの世界にセンセーションをもたらした美の表現に迫ろうとするものである。

本展はChapter1からChapter9まで9章で構成されている。以下、各章の見どころを評者の視点から解説していきたい。

2 紹介

第1章「有機物への偏愛」は、人類に装

いの原点である毛皮や動植物をモチーフとして取り入れたアクセサリやドレスの展示である。その中でも目を引くのが、ベルギー出身の美術家ヤン・ファールブル（1958～）のタマムシの羽で覆われた甲冑である。この作品は本展のチラシにも使用されていることから、メイン・イメージといっても良いだろう。ファールブルは、『ファールブル昆虫記』のアンリ・ファールブルの曾孫であり、『ファールブル昆虫記』にインスピレーションを得て製作を行っているという。その作品は、タマムシで覆い尽くされた人体や、甲冑、タマムシで作られた巨大なシャンデリアなどさまざまである。

第2章「歴史にみる奇想のモード」で目を引くのは、19世紀のファッション誌 *Le bon ton, journal des modes* の付録として作られた紙製着せ替え人形の展示である（写真1）。これは、顔と身体が分断²⁾された着せ替え人形で、我々の子供の頃の遊びの中の風景に存在していたことを思い起こさせるものである。しかし、現在それを眺めてみても不思議な存在感を放っているのはなぜだろうか。シュルレアリスムは、ブルトンの宣言以前から、意図する、しないにかかわらず存在していて、一つの系譜としてファッションに影響を与えているのではないだろうかと考えさせられる展示である。

第3章「髪へと向かう、狂気的愛」は、「奇想」というキーワードに相応しいヘアに対する展示である。写真2の左は永澤陽一の2004年秋冬のボディ・アクセサリで人工毛とス



写真1 展示風景より 紙の着せ替え人形（1839～1841年）
京都服飾文化研究財団（以下 KCI）蔵（大倉英揮（黒目写真館）撮影）



写真2 展示風景より 左：永澤陽一 ボディ・アクセサリ（2004年秋冬）、
右：マルタン・マルジェラ ボディ・アクセサリ（2004年秋冬）
いずれも KCI 蔵（2022年1月27日平井撮影）

エードの紐で作られている。この永澤のコレクションには、我々はさまざまな既成概念に縛られてしまっていることに対して、今後世の中はどんどん変わっていくという反発やアイロニーが込められているように感じる。右はマルタン・マルジェラの2004年秋冬のドレスでレーヨン・ジャージ素材にヘアをプリントしている。ネックレスはビーバーの毛である。

第4章は「エルザ・スカパレリ」の特集である。スカパレリはファッションの文脈では良く登場するデザイナーであるが、一般の人にはあまりその存在が知られていない。スカパレリは、ココ・シャネルと同時代に活躍し、シャネルと双壁を成すデザイナーといえるが、現在は当時の隆盛からはだいぶ遠のいてしまった感がある。そんなスカパレリであるが、本展では、もっともシュルレアリスムに近いところにいたデザイナー

として紹介されている。それから写真3上段中央のイヴニング・ドレスの「ショッキングピンク」というカラー名はスカパレリが命名したといわれている。彼女がこの色を作ったわけではないが、色彩が気に入って「ショッキングピンク」というカラー名を先駆的に使って、ファッションカラーとして世に出したのである。さらに、自分のメゾンで「ショッキングピンク」ばかりのドレスを一度期に発表して注目を浴びた。この「ショッキングピンク」は本展のテーマカラーにもなっている。

第5章「鳥と帽子」では、16世紀以降の面白い帽子の形を見ることができる（写真4）。節操なく先端に伸びていく帽子たち。モードに対する狂った情熱のようなものを感じることができる。過剰に過剰を重ねていくことの面白さ、たとえば、帽子の先端を異なる角度から見た時に形態自体の面白さを見出していくなど。何か過剰な情熱を傾けること



写真3 展示風景より 下・ケース内：エルザ・スカパレリ イヴニング・ケープ（1938年）KCI蔵
上段中央：エルザ・スカパレリ イヴニング・ドレス（1952年頃）神戸ファッション美術館蔵
中段右：エルザ・スカパレリ イヴニング・ドレス（1935年）KCI蔵
中段左：エルザ・スカパレリ イヴニング・ケープ（1937年）神戸ファッション美術館蔵
（2022年1月27日平井撮影）



写真4 展示風景より エルザ・スカパレリ 帽子 (1940年代)
KCI 蔵 (© 京都服飾文化研究財団 畠山崇撮影)

によって、今まで見たことがない風景、奇想というエキセントリックに通じるような形が表現されている。

第6章「シュルレアリスムとモード」は、裁縫とシュルレアリスムの関係性について何か共通点があるのではないかと考える展示であり、この展覧会の一つの重要なエッセンスとなっている。シュルレアリスムの思想を物語るに欠かせないロートレアモン (1846～70) は、シュルレアリストにインスピレーションを与えたフランスの詩人であるが、彼の「解剖台のミシンと蝙蝠傘の偶然の出会いのように美しい」という語句は、シュルレアリストたちの美に対する一つの基準、そして象徴句のように使われている。彼は、二つ以上のかけ離れた機能を持つ物を掛け合わせることによって、デペイズマン効

果³⁾を扇動させ、そこから見たことがない表現が生み出されることを期待してこの手法を取り入れている。それを再現しているのがマン・レイの作品である。たとえば「イジドル・デュカス⁴⁾の謎」という作品の麻布の中には、ロープで巻き付けられた得体のしれないミシンが仕込んである。また、レイの「贈り物」では、アイロンはオブジェであるが、アイロンに金属の鉗が打ってある。このように、まったく異なる機能性を持つ物を掛け合わせることによって、まったく違うものが生み出されており、それぞれの機能性は剥奪されてしまっているが、何か違った刺激に満ちた新たな表現になっている。これら、アイロニーに満ちた作品は、シュルレアリストたちの主要な表現方法であるが、アイロンというモードに関わるイメージのものが期せずして

この展覧会の象徴的な作品になっている。

リチャード・マーティンは『ファッションとシュルレアリスム』の中で、各機能性の破壊と融合が発想の源泉にあると述べているが[1991: 11]、本展は「奇想」というキーワードでこれを広げることによって、さらにダイナミックな視点の中から、モードとシュルレアリスムを再考する機会になっているのではないだろうか。

他の見どころは、1930年代の『ハーパーズ・バザー (Harper's Bazaar)』の表紙の展示である。アドルフ・ムーロン・カッサンドルが手がけた『ハーパーズ・バザー』の1937年2月号、1938年2月号の表紙はシュルレアリスムの影響を受けているといえるであろう。一見すると、モード誌、ファッション誌の表紙と思えないが、シュルレアリスムという芸術運動がモードに与えた影響が強かった時代といえるのではないだろうか。

それから、本館と新館の橋渡しをする作品として、ユアサエボシの「着衣のトルソーと燃えている本」が目を引いた。彼は現代作家で、1924年のシュルレアリスム宣言の年に生まれたという架空の略歴を呈示している。

第7章「裏と表——発想は覆す」の見ど

ころは、トキオクマガイの「食べる靴」シリーズのパンプスとシューズの展示である。これは、食品サンプルの樹脂製食品の技術を応用し、過食的な美、食べられる靴を表現した作品で、トキオクマガイの代表作として他の展覧会でもよく見かける作品である(写真6)。レディー・ガガも2010年にMTVビデオミュージックアワードで肉ドレスを着て伝説となったが、これらは、明らかにサルバドル・ダリに影響を受けているのではないだろうか。ヴィヴィアン・ウエストウッドはパンクの女王と呼ばれたが、本展で展示されているつま先を足指の型に成形したミュール(写真7)は、ルネ・マグリットの絵画「赤いモデル」⁵⁾を連想させる。すなわち、表と裏が逆にされてしまったり、中側が表側に出てきたり、そういう発想をシュルレアリストたちは好んで取り入れていたが、これらが、モードに突然出てきたのではなく、シュルレアリスムの影響があるのではないかと思わせる展示である。

他にマルジェラの額縁のネックレスが2点展示されていた。通常の素材を用いない意外性のある素材に置き換えて制作された、ブリコラージュ的手法⁶⁾はマルジェラらしいアプローチというか、マルジェラの発想力の



写真5 展示風景より 左：ユアサエボシ「着衣のトルソーと八つの砲弾」(2021年)
中央：ユアサエボシ「着衣のトルソーと二匹の魚」(2021年)
右：ユアサエボシ「着衣のトルソーと燃えている本」(2021年)
いずれも個人蔵(以降の写真はすべて2022年1月27日平井撮影)



写真6 展示風景より 左:トキオクマガイ 靴「食べる靴」(1984年頃) 右:熊谷登喜夫 パンプス「食べる靴」(1984年頃)
KCI 蔵、熊谷登喜夫氏遺贈



写真7 展示会風景より ヴィヴィアン・ウエストウッド ミュール (2000年春夏) KCI 蔵

面白さを再確認することができる展示であった(写真8)。

第8章「和の奇想——帯留と花魁の装い」は、花魁おいらんの装いの展示である。花魁の装い自体が奇想ではないかという考えから、花魁の装いに注目している現代作家の館鼻則孝のコレクションなどが展示されている。吉原の大門と白や薄い色の着物を着た遊女が描かれている。

最終章となる「ハイブリッドとモード」の

はじめに登場するのが館鼻の高下駄からインスピレーションを得たヒールレスシューズである。このシューズは館鼻が東京芸術大学の卒業制作で制作したものである。しかし卒業制作ではさほど評価されず、本人がいろいろなところに100通程度の案内を送付し、3通返事が返ってきたうちの1人がレディー・ガガの専属スタイリストのニコラ・フォルミケッティだったという(写真9)。他にもヒールレスシューズのバリエーションが多数展示



写真8 展示風景より マルタン・マルジェラ ネックレス 四角と丸の2種類 (2006年秋冬) KCI 蔵

されている（写真10）。



写真9 展示風景より 舘鼻則孝 ヒールレスシューズ（2010年）作家蔵

つぎに紹介するのは、永澤陽一のジョッパーズパンツ「恐れと狂気」である（写真11）。永澤がボニーの革のジョッパーズパンツを初めて製作したのは1999年であるが、永澤は当時を振り返り、その頃はファッション全盛期であったが、今後、経済成長とともに環境問題などがクローズアップされてくるだろうと予測していた。そんな時、キュレーターのロランス・ベナウムから、パリのプランタン百貨店で開催された「パンタロン展」で何か制作してほしいと依頼を受けて作ったのがジョッパーズパンツ「恐れと狂気」である。永澤は、この作品にはさまざまな思いが込められているというが、たとえば、世間では、人間は動物を殺して食べていると批判されるが、その中には仔牛や小さい動物もいて、それに対して可哀想だといっている割には、自分たちもそれを食べているという相矛盾する状況に対して何か狂気のようなものを感じたという。本展で展示されている3点は、2008年に開催された永澤の個展「恐れと狂気」（京都）のために制作されたものである。



写真10 展示風景より 舘鼻則孝 ヒールレスシューズ（2021年）作家蔵



写真 11 展示風景より 永澤陽一「恐れと狂気」ジョッパーズパンツ（2008 年）
神戸ファッション美術館蔵

永澤は、他にも人工芝、ゴム紐、人工人毛、魚業網などの布地でない素材を用いた従来の既成概念にとらわれないショッキングな衣服を多数制作している。

展示を締めくくるのは、串野真也の作品である。広島生まれ、京都在住の作家で、江戸時代の奇想の絵師、伊藤若冲（1716~1800）の影響を受けていると思わせる作品群である。若冲は鳥の絵をたくさん描いているが、写真 12 の靴は人の髪の毛がついていて、革の表面には血管が浮き出ているというデザインである。他にも、いろいろな動物が融合されたキメラ⁷⁾や、ハイブリッドというキーワードで展示を行っている（写真 13）。

そして最後にタمامシが登場するが、本展は最初にタمامシが登場して最後もタمامシで終わるという構成になっている。以上が評者の視点から見た本展の見どころの解説である。

3 おわりに

シュルレアリスムという芸術運動はモードに強い影響を与えており、なおかつそれが一過性ではなく、長きに渡ってモードに影響を与えてきたことを、展示を通して確認することができた。それでは、なぜシュルレアリスムがモードに影響を与えてきたのか



写真 12 展示風景より 串野真也 LUNG-TSHUP-TA (2009 年) 作家蔵



写真 13 展示風景より 串野真也 Aries (2007 年) 作家蔵

と考えると、オブジェの作品を作り、身体を分断化し、唇だけ取り出すなど、シュルレアリスムの中にモードに応用しやすい表現要素が多くあったからではないかと考える。

すなわち、シュルレアリスムとモードは非常に親和性があったということを本展で確認できた。現代のファッションデザイナーたちがダリなどのシュルレアリスムに多かれ少なかれ影響を受けていた例として、コムデギャルソンが 2021 年春夏コレクションで発表した目玉のワンピースを挙げられるかもしれな

い。

最後に本展の三つの意義について述べてみたい。

第一は、シュルレアリスムとモードの相関関係を示したことである。端的にいうと、シュルレアリスムという革命の表現からインスピレーションを受けてきた現代やそれ以降のデザイナーもいるだろうし、逆にいえば、シュルレアリスムの表現の中に、モード的な要素が存在していたことを見てとれる展示もあった。

第二は、シュルレアリスムはその時代だけのものではなく、その前後の時代にもつながっている思想であり普遍的要素であるということである。1920年代に始まるシュルレアリスムは、この時代特有のものではなく、今の時代にも地続きで引き継がれているものである。シュルレアリスムは、芸術の中でどんな表現ができるかという方法論を考える芸術運動ではなく、一つの思想だったといえるのではないだろうか。それは普遍的な要素を持っていて、シュルレアリスム運動の前にも、そういう世界が存在していたであろうし、シュルレアリストがすごく興味を持ったような事象もあったかもしれない。また、現代のモードの中にもそういうものを見ることができるのではないだろうか。

第三は、20世紀最大の芸術運動だったシュルレアリスムが一般に広がる契機として、モードは重要な役割を担ったということである。たとえば、ステージ上の芸術運動だけではなく、それをモードの中に引き込むことによって、『ヴォーグ』や『ハーパーズ・バザー』といった、いわゆるファッション誌の表紙のシュルレアリスム色が突然強くなり、明らかにシュルレアリスムの影響を受けていることが明確な時期があった。すなわち、モードの中にシュルレアリスムというものが色濃く影響を与えているし、モードをステージとして、シュルレアリスムは、より実用的かつ一般に広く拡散していく契機になったと考えられる。

最後に、第一次世界大戦が終結するとともにシュルレアリスムの台頭期に入ったことを指摘したい。圧倒的な殺戮や、破壊行為を目の当たりにした表現者たちが革命的な精神のもとにシュルレアリスム運動を立ち上げ、そこから新しい時代を切り拓いていった。それに対して今は世界規模のパンデミックの渦中で、戦争と病理の違いはあるが、世界規模に負の影響を受けている状況は少し似ているものがある。そんな時代に、我々は疲弊してい

て、さまざまな制約を受けて、精神的にも縮こまってしまっているが、かつてシュルレアリストたちは死に近い時代背景の中であれだけのパワーを持って時代を革新的に進めようとしたことは注目に値するだろう。そういう意味では、モードも同じ精神性を持っているといえるではないか。なぜなら、ファッションはつねに時代の先端を走っているし、つねに時代を切り拓いてきたからである。当時と時代背景が重なり合っているような、疲弊した今の時代だからこそ、これからファッションを志す若者には是非とも本展から何かを感じ取ってほしいと思うし、非常に意義のある素晴らしい展覧会であった。

謝辞：取材に協力頂いた東京都庭園美術館学芸員神保京子氏、ファッションデザイナー永澤陽一氏に感謝する。

<注>

- 1) 1910年半ば、第一次世界大戦中に起こった芸術運動で、既存の秩序や常識に対する、否定、攻撃、破壊といった思想を大きな特徴とする。
- 2) シュルレアリスムにおける身体表現は、唇や瞳、手などが意志を持たない「物体＝オブジェ」となって開示され、身体の断片への偏愛はさまざまな作品の中に散見される〔神保 2008: 95〕。
- 3) デペイズマンとは、異なった環境に置くことを意味するフランス語で、あるものをコンテキストから未来あるいは別の場所に移動し、違和感や強い衝撃を与えるシュルレアリスムの手法である。
- 4) イジドル・デュカスとは、ロートレアモンの本名のこと。
- 5) 「赤いモデル」は、1935年に第一作（ストックホルム近代美術館）で描かれて以来、マグリットの代表作の一つである。「赤いモデル」には、靴という問題に対する解決が提示されている。足と靴がいずれも動物の皮膚

で包まれたものに他ならないことを認識することによって生まれる戦慄。「赤いモデル」とはまさしく皮膚を剥いだ時に現れる血まみれの肉の木型にほかならないのではないだろうか〔オットアンジェ＆南 2011: 85〕。

6) 寄せ集めて自分で作る、ものを自分で修繕することで、器用仕事とも訳される。

7) キメラ (chimera) は、ギリシャ神話において、ライオンの頭とヤギの胴体、蛇のしっぽをもつとされる怪物。

<参考文献>

オットアンジェ、ディディエ＆南雄介監修 2011『シュルレアリスム展——パリ、ポンピドゥセンター所蔵作品による』国立新美術館編、東京読売新聞本社。

神保京子 2008「シュルレアリスムと写真——瘡癩する美」『AVANTGARDE VOL.5 特別号』T.G.O.UNIVARTO。

神保京子監修 2022『奇想のモード——装うことへの狂気、またはシュルレアリスム MODE SURREAL A Crazy Love for Wearing』青幻舎。

マーティン、リチャード 1991『ファッションとシュルレアリスム』鷺田清一訳、Edition Wacoal。